

ADHD 症状の原因に関する考察

～特に“不注意傾向”と認知との関連について～

かがわ総合リハビリテーション福祉センター

香川県発達障害者支援センター『アルプスかがわ』 新井 隆 俊

キーワード：ADHD、WISC-III、不注意、多動-衝動性

要 旨

注意欠除多動性障害（ADHD）の障害特性は“不注意”と“多動-衝動性”で、その発現の機序は複数の異なる原因によるのではないかと想像される。対象児のデータを整理したところ、“不注意”が言語理解力の低下と、また“多動-衝動性”が処理速度の低下とそれぞれ関連している可能性が示唆された。

1. はじめに

注意欠除多動性障害（ADHD）の障害特性は“不注意”と“多動-衝動性”だが、このふたつの特性は混在することも多く、その発現の機序は2つ或いはそれ以上の異なる原因によるのではないかと想像される。今回の報告は、そのことを検討するための最初のきっかけとするものである。

2. 対 象

2009年4月から2010年8月までの香川県発達障害者支援センター『アルプスかがわ』（以下、当支援センター）の利用者のなかから、ADHD-RSとWISC-IIIの2つの検査を施行し、医師の診察を受けてADHDの診断を受け、当支援センターと学校等社会生活の現場の両方で当事者の行動観察を実施した者34名全員の検査データを検討した。

34名の内訳は表1の通りである。

<表1 対象児の内訳>

男 / 女	32名 / 2名
学年	小学1～2年生 19名
	小学3～4年生 11名
	小学5～6年生 3名
	中学生 1名
IQ (WISC-III)	76～130 平均 99.3
ADHD-RS 得点	13～48 27.8

3. 方 法

(1) 作業仮設

当支援センターは発達障害児者の社会適応等の支援について様々な相談を受けている。

相談に対して助言等を行う場合、当事者の障害特性に関するアセスメントをまず実施するが、その検査は、①障害タイプの見当をつけるための検査と、②認知等の特性を理解するための検査とを組み合わせる。主訴や行動特徴からADHDが疑われる場合は、①ADHD評価スケール（ADHD-RS）と②WISC-IIIを組み合わせることが多い。

ADHD-RSからは、不注意と多動-衝動性のどちらの傾向が強い障害タイプなのかを推し量ることができる。またWISC-IIIからは、認知と情報処理上の特性を把握することができる。この2つの検査の結果を照らし合わせれば、行動上の特徴と認知特性との間で関連性のある要素とない要素とがおそらく現れてくるだろう。ADHD-RSの結果のなかの、WISC-IIIの結果と関連性のある要素が認知処理に由来するものであり、関連性のない要素が認知処理以外の原因に由来するものであると想像することができるのではないかと考えた。

(2) 検討方法

まず対象者を、ADHD-RSの不注意項目の得点から多動-衝動性項目の得点を引いた数値が大きい（不注意傾向が大きいと考えられる）順に並べた表を作って、それを3つのグループに分ける。一方で、WISC-IIIの4つの群指数（言語理解・知覚統合・注意記憶・処理速度）のプロフィールから2つずつ4

通りの組み合わせを作って較差パターンで分類した番号（表2-1～4）を先述のグループに当てはめていく。このようにして、ADHD-RSから作った不注意の強さとWISC-IIIに現れる群指数の較差のパターンがどのような関連を見せるか検討する。

<表2-1>

	言語理解	高い(↑)	低い(↓)
知覚統合			
高い(↑)		1	2
低い(↓)		3	4

<表2-2>

	注意記憶	高い(↑)	低い(↓)
処理速度			
高い(↑)		1	2
低い(↓)		3	4

<表2-3>

	注意記憶	高い(↑)	低い(↓)
言語理解			
高い(↑)		1	2
低い(↓)		3	4

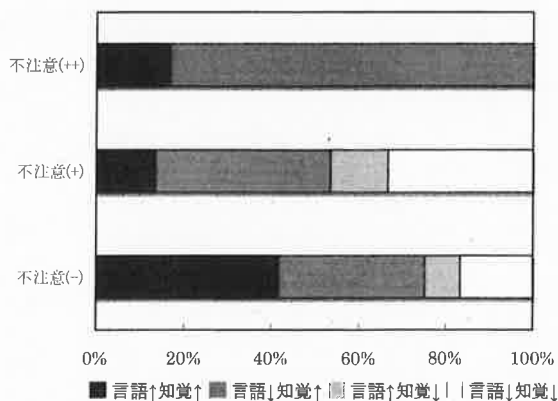
<表2-4>

	注意記憶	高い(↑)	低い(↓)
言語理解			
高い(↑)		1	2
低い(↓)		3	4

4. 結果

検討結果を図にしたものを以下に示す。

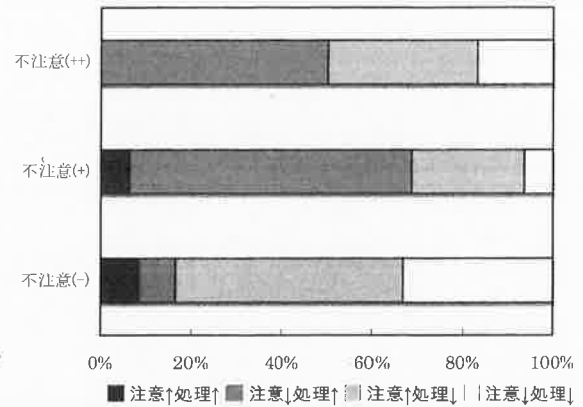
<図1-1 言語理解と知覚統合の比較>



不注意の傾向が強いケースほど、言語理解と知覚統合の群指数間に較差がある（言語理解が低く知覚統

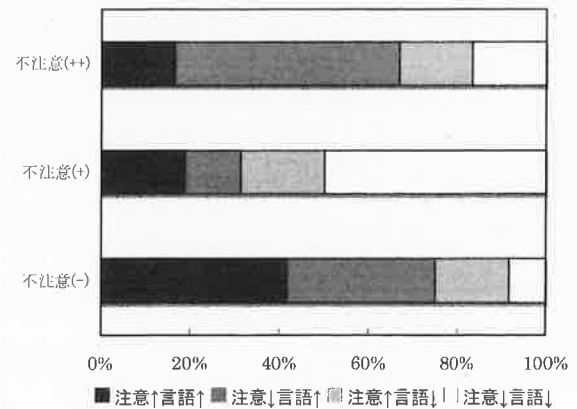
合が高い）傾向が窺われた。一方、不注意傾向が弱いケースでは、言語理解と知覚統合の両方が高い傾向にあり、またそのほかの群指数間の較差との関連も認められなかった。

<図1-2 注意記憶と処理速度の比較>



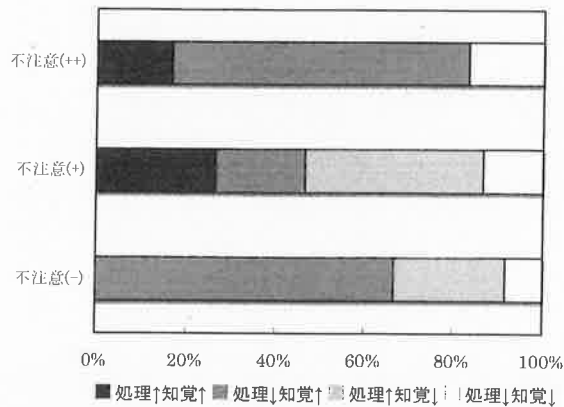
全体的に注意記憶と処理速度の両方が高いケースはわずかであった。不注意の傾向が強いケースに特徴的な較差の傾向はなかった。一方、不注意傾向が弱いケースでは、注意記憶の高低にかかわらず処理速度が低下する傾向が窺われた。

<図1-3 注意記憶と言語理解の比較>



不注意の傾向が強いケースと弱いケースとともに、すべてのパターンが混在しており、不注意の傾向と群指数間の較差の関連は認められなかった。注意記憶と言語理解の両方が高いパターンが不注意傾向が弱いケースほど多くなっていくようだが、不注意傾向が強いケースに共通したパターンは特に認められなかった。

<図 1-4 処理速度と知覚統合の比較>



不注意の傾向が強いことと群指数間の較差との関連は認められなかった。また不注意傾向が弱いこととの関連も認められなかった。

以上の結果を表にまとめると、次のようになる。

<表 3 不注意傾向に関連する WISC-III 群指数>

不注意傾向	言語理解 < 知覚統合
多動-衝動性傾向	処理速度の低下

以上の結果より、不注意傾向は、言語理解が知覚統合より低いという較差によって強まることが窺われた。なお、多動-衝動性は、他の群とは関係なく、処理速度の低下と関連があることが窺われた。

5. 考察

ADHD-RS で不注意傾向が強かった対象に共通したエピソードは、課題に集中し続けることが難しい・行動の切り換えに時間がかかる・片付けが苦手・机の周りなどが散らかっている・忘れ物をよくする等々であった。彼らは物事の先を見越して計画的に行うことが難しく、それが原因で上述のようなエピソードとなると言われている²⁾。これらは継次処理や系列化と言われているもので、時間軸に沿って一連の活動や動作を組み立てる能力であり、計画能力あるいは遂行機能などと呼ばれている。

今回のデータ整理で、“不注意”が言語理解力の低下と関連している可能性が示唆されたが、このことと今回の対象児たちの継次処理や計画能力の

低下を窺わせるエピソードとは矛盾しない。つまり WISC-III の言語性検査で測ることのできる継次処理や系列化能力の低下が注意の機能と深く関係していると言えるだろう。

一方で、“多動-衝動性”は処理速度の低下との関連が窺われたが、それ以外の特徴は認められなかった。エピソードも、授業中の離席など多動が目立つ・手遊びや体を揺するなどじっとしていることが苦手・カッとなった時の暴言や暴力があるなどのマイナス面と、新しいことに積極的に取り組む・片付けなど素早い・理解できると行動への取りかかりは素早いなどのプラス面もあり、不注意傾向の強い子どもたちと違って、認知処理機能との問題とは思われない。今回の整理でも、そのような関連性は見受けられず、“不注意”と“多動-衝動性”は全く異なる機序で起こっていると考えるべきではないかと思う。

参考・引用文献

- 『診断・対応のための ADHD 評価スケール』
ジョージ・J・デュポール他, 明石書店, 2008
- 『WISC-III アセスメント事例集』
藤田和弘他, 日本文化科学社, 2005